

発達障害学生への支援についての実践的研究：学生相談室における支援実践の様子から

| | |
|-----|---|
| 著者 | 渡邊 登至明 |
| 雑誌名 | 人権を考える |
| 巻 | 23 |
| ページ | 67-83 |
| 発行年 | 2020-03 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1443/00007899/ |

発達障害学生への支援についての実践的研究 ～学生相談室における支援実践の様子から～

外国語学部非常勤講師 渡邊 登至明

1. はじめに

学生相談の現場では、中嶋ら(2015)が述べているように、従来は無気力学生やリストカットなどの自傷行為さらには境界性パーソナリティを筆頭にパーソナリティ障害のさまざまな行動化によって翻弄されるといった状況が目立ったこととして存在していたが、近年では発達障害の学生が増加してきている。そして、こうした状況に関する報告は多数なされてきているが、たとえば青野(2017)は、学生相談における発達障害をもつ学生が年々増加している様子をデータとして挙げ、そのような状況の中で発達障害をもつ学生への対応に大学教職員等の関係者が他人事では済まされず苦慮している様子であることを述べている。また岩田(2007)は、学生相談における発達障害をもつ学生の増加とそのような学生への支援が試行錯誤的に行われている現状と、それゆえに発達障害学生の支援についての関心が非常に高まっていることを指摘している。このように、大学生活を送る若者の心の問題における以上のような変化および状況は、筆者が関わっている本学の学生相談室においても同様のことだと感じられ、近年では「発達障害問題」というべき事態に苦慮してきているところである。そこで本研究では、発達障害についての基礎的な理解を確認したうえで、学生相談室での実際のケースを参照することで、学生相談室における「発達障害問題」の特徴を捉え、対応を考察し、ひいては支援における課題を検討および提言することを目的とする。

2. 発達障害の基礎知識

・定義、種類、予後や原因その他に関して

発達障害の定義については一つに定まっているわけではないが、精神医学的な観点からのDSMやICDといった診断分類によるものや行政用語の観点からの発達障害者支援法（2005）によるもの等を総合すれば、以下のようなポイントが挙げられると思われる。

①幼少のころから、言語機能の獲得、運動機能の発達、知能・学習能力の伸長、共感性や社会性の発展、対人スキルの獲得、環境適応の態度形成、などの認知や行動においてさまざまな発達の遅れや偏りが見られる。

これについては、代表的な発達障害として、知的障害、注意欠陥多動性障害、学習障害、自閉症、高機能自閉症、アスペルガー障害、広汎性発達障害、などが挙げられることが多い。このうち中心となるのは知的障害であるが、実際には障害が重複することも多く、概念区分も困難な場合も少なくない。このようなさまざまな名称が乱立する状況に対しては、滝川（2004）は「理解力（認識力）の発達水準」と「関係性（社会性）の発達水準」という二つの視点で捉えていくことが有効であると述べている。同じくこのようなさまざまな名称が乱立する状況に対してDSM5（2014）では、従来の自閉症・アスペルガー障害・広汎性発達障害を基本的には共通した特徴をもつ自閉症スペクトラム障害としてひとまとめにする試みがなされている。

②中枢神経系（脳）の生物学的成熟に深く関与した機能発達の障害あるいは遅滞であってその発現は通常は乳幼児期あるいは小児期であり、また精神障害の多くを特徴づけている寛解や再発の見られない固定した経過をとるのである。そしていずれにしろ、原因は不明な点も多いが、少なくとも原因が親の養育にあるという考え方は否定されている。

これらについては、まず、根本的な障害は生涯変わらないという意味である。つまり、薬物療法などの医学的治療やカウンセリング・心理療法といっ

た心理学的アプローチによって障害は根本治癒しない。ただし、自己理解や、周囲の不適切な対応による情緒的問題（抑うつなどの二次障害）の改善、訓練による対処法の学習、および発達障害なりに進む発達プロセスの促進、等々による適応の改善や向上には期待できるところがあるといえる。次に、発達障害の原因が遺伝的要因や妊娠・胎児期・出産時・新生児期などの誕生以前あるいは誕生直後の何らかの障害のために中枢神経系の障害が生じて起きる障害であることが強調されているところである。ただし、元々もっている本人の障害に対して不適切な対応（場合によっては虐待）をして問題が複雑になることはあり得ると言えよう。また、生後の環境的要因としての幼少期の親など親密な他者との関係性の問題をそもそもの原因として強調する議論（たとえば岡田（2012）の愛着障害や、川上（2012）の関係性体験の議論、など）も存在することを指摘しておく。

・よくある疑問について

次に、学生相談業務においては日頃から発達障害学生に関心があったり関わったりする教職員より投げかけられることの多い疑問というものが存在するように思われるが、こうした疑問に対していかに答えるかということは、発達障害について本質的なところを理解しより良い対応や支援につなげていくためにも重要だと考えられる。このように、発達障害を取り巻く人々の疑問に内包された本質的な点を重要視しそれについて丁寧に考え対応していくことの重要性については、篠山（2019）が児童精神医学の立場から、子供の保護者から寄せられる疑問とそれについての検証という形でまとめている。そこで、以下では篠山（2019）に従って、発達障害に関するよくある疑問とそれに関する議論を見ていくことで、より本質的な理解を得ることとする。篠山（2019）によれば、児童精神医学の現場において保護者からしばしば持ち込まれる疑問とそれについて考えられることとは、以下のようであるという（篠山2019から要約抜粋）。

① どうして増加してきているのか？

これについては、世の中の関心の高まりによって発達障害の特性を持つ人が掘り起こされるようになったことや、発達障害概念自体の変化によって以前（昔）であれば何ら異常とされなかった人たちまでもが発達障害とみなされているようになってきていることが指摘できる。また、それでもこのようなブームの背景にはこの概念を取り入れて解決すべき現代社会の課題（たとえば多様性の容認）が存在してもいると考えられる。

② 発達障害は個性なのか？

これについては、個性というものをどう捉えるのかという問題である。もともと備わっている特性でありいわゆる病気とは異なるという意味で個性と言うのであればそうであるともいえるが、しかしながら特に気にしなくてもいいという意味で個性と言うのであれば、生活するうえで理解と配慮が必要になってくることを受け入れる必要がある。いずれにしろ、どういう意味で個性という言葉が受け取られるか分からないため、安易に発達障害は個性だとは言えないのであり、当事者や周囲の人間などその言葉を使う人がどういう意味や意図で使っているかについて考える方が重要である。

③ 甘えではないのか？

これについては、発達障害があると標準的な基準とズレが生じるため、どの程度の甘えや怠けがあるのか本人も周囲も分かりづらいことになりがちである。しかしながら、たとえどこまでが甘えかは分かりづらいもののだとしても、苦手なせいで結果が出ないことを甘えや怠けのせいだと捉えないようにする注意が必要である。

④ 発達障害という概念やその理解は必要なのか？

これについては、他の大多数の人と違う発達障害特性は生きにくさにつながるが、それはつまり、発達障害がある人というのがトラブルメーカーや問題児・困った人などという否定的なイメージになってしまいがちであり、発

発達障害のある人が理解のない環境で育ったり過ごしたりするうちにパーソナリティ形成の歪みや二次障害を引き起こしてしまうだけでなく、パーソナリティ形成不全や二次障害によって周囲さらには発達障害のある人への否定的イメージを強めていくという悪循環に陥ってしまうということになりがちだということであり、こうした状況があるために発達障害という概念が必要とされるのである。すなわち、発達障害という実態が元々存在してそれに対して支援や配慮をしていくようになったわけではなく、支援や配慮をする必要が生じたために発達障害の概念が形作られてきたと言える。

以上、篠山（2019）による発達障害を取り巻く疑問と考え方について見てきた。以上をふまえると、発達障害とはそれ単独で取り出して扱われるようなものではなく、発達障害という概念にどう関わるのかによって左右されるところが大きいものであるため、この概念に本人はもちろん周囲の人間や社会全体がどう向き合いどう関わるかが問われるという意味で、臨床実践・対人援助における問題事象の一つとしての「発達障害問題」という言い方がふさわしいのではないかと考えられる。

3. 相談支援の実際

ここまで、発達障害についての基本的なところを確認してきた。ここからは、本学の学生相談室におけるいくつかの「発達障害問題」の実際事例を取り上げることとする。なお、本論考で文中に提示される事例に関しては個人が特定されないように大幅に加筆修正してあるが、本論考の趣旨に照らして本質的なものは棄損されないように記述してある。

・事例1

部活や学内での対人関係に悩み、大学生活の途中から自発的に相談に訪れたケースである。本人によれば、部活や学業という限られた場面における周

困と上手くコミュニケーションがとれず、頼まれて断れないうちに部活や学業での仕事を引き受けすぎてしまうことになりがちであった。このためストレス過多となり、身体症状を呈するとともに、そうした状況に対する不満感や被害感を募らせ、またそのような場面に対する恐怖感も抱くようになっていた。

このケースの場合には、継続的なカウンセリングの中で、対人関係全般における苦手意識を徐々に自覚していった。さらには、「聞いたことをまとめるのが苦手」「言語化して伝えるのが苦手」「話の要点を捉え損ねる」「人の気持ちがわかりにくい」「急な変更に耐えられずパニックになる」「人に触れられるのが苦手」などといった発達障害特性が推察されるような問題についても自覚していき、自ら「発達障害ではないか」と専門的な観点からのアセスメントを希望するに至った。そこで知能検査を中心にした心理検査を施行したところ、自閉症スペクトラム障害の傾向が存在することが疑われる結果であり、そうした面からの自己理解を深める材料とした。その上で、主に対人関係における困難さに焦点を当てた相談・支援を行っていき、最終的には卒業・就職に至った。

・事例2

何をしても上手くいかず、落ち着きもなく、「ADHD（注意欠陥多動性障害）ではないか」と悩み、大学生活の途中から自発的に来談したケースである。本人によれば、「優先順位をつけるのが苦手で何から手を付けていいかわからない」「アルバイトでもミスが多く迷惑をかけてしまう」「大学のスケジュール管理や課題処理・資料整理が上手くできない」「忘れ物や無くし物も多い」「SNSでの複数の同時的な対人関係を処理することが上手くいかず友人知人から不信感を持たれてしまう」など日常生活におけるさまざまな場面において困りごとが頻発していた。なお、これまでの生育歴に関する情報としては、中学時代にはいじめを受けて不登校だった時期もあったという。また、高校時代にも大学生活と同じような困難があり成績も悪かったが、得意科目に絞って勉強することで大学に入学することができたのだという。そ

して、これまでは自分に対する問題意識はなかったが、現在では、大学での単位が危険な状態となり不安に陥ったことに加えて、周囲と同じようにできない自分に対して不安と焦りを強くし情緒不安定となっていた。

このケースの場合には、上手くいかず周囲とは違うかもしれない自分に対する自覚が芽生えニーズも存在したので、まずは自己理解を深めることと、そうした自分への対策を練るために知能検査を中心とした心理検査を実施した。その結果、注意欠陥多動性障害というよりは自閉症スペクトラム障害の傾向が推測される所見となり、その結果を踏まえて、継続的なカウンセリングの中で、情緒面のケアによる心の整理や安定を図るとともに、教職員と連携もしながらの就学支援、および大学生活だけでなくアルバイトや友人関係といった日常生活全体にわたる相談・支援を行っていった。また、進路を控えての将来不安も高まっていたため、キャリアセンターを紹介し連携をとった。こうした中で、社会に出ることの不安が大きいくところもあり、卒業後は進学をするに至った。

・事例3

思春期頃より心身症を呈しており、受診した身体科医師より発達障害の可能性を指摘され検査・診断を勧められた。そして、注意欠陥多動性障害と自閉症スペクトラム障害との診断が確定した際に学生生活の相談先として大学内のカウンセリングを勧められて、大学生活の途中から来談したケースである。本人によれば、大学生活では学力的についていくのが困難であり、とくに「物事に時間がかかり同時処理が苦手」であった。また、「せっかく大学に入ったのだから」と留学・資格勉強やアルバイト・サークル活動・さらには就職活動に向けてのかなり早期からの情報収集など、さまざまなことをやろうとして本人のキャパシティを超えてしまっており、ストレス過多によって心身ともに不調をきたしていることが明白な状態であった。

このケースの場合には、継続的なカウンセリングの中で、まず医療機関との連携や、授業や定期試験における合理的配慮に関して教職員との学内連携を行うことによる修学支援を行い、同時に情緒面についても心の整理と安定

化を図る支援を行うこととした。本人としては困ったことがあるとしばらく来談を続けるという‘五月雨式’の来談を続けていく中で、診断や配慮を受けることへの葛藤や、たとえば障害者として就職するのか一般就職をするのかといった将来への悩みが話題になったり、さらには、本人の障害特性に理解がなくプレッシャーをかけてくる親子関係での葛藤や、こだわりの強さから対人関係において気を使い過ぎてしまうことが多く苦手意識があることなども話題になるなど、あらゆることが躓きとなり悩みや困難が発生していく本人の日常生活全般を丸抱えするような形での相談・支援となっていく。こうした中で、在学中には進路を決めることはできなかったが、最終的には就職し仕事を始めるに至った。

・事例4

大学入学前に保護者と来談したケースである。本人および保護者によれば、中学・高校時代に学校生活の多忙により不登校となった際に医療機関を受診し、自閉症スペクトラム障害と診断されて薬物療法とともにカウンセリングも受けていたという。障害特性による具体的な困難としては、‘集中力が無い、段取りが悪い、同時に物事をこなすことが出来ない、などで課題などの処理に時間がかかって抱えきれなくなってしまう’ということであり、大学生活への不安が高まっていた。

このケースの場合には、診断書の提出や、大学生活における支援体制の確認・支援や合理的配慮の希望が出されたため、学内各部署と連携して支援体制を整えて就学支援や日常生活支援を行い、継続的なカウンセリングの中で、新しい環境になじむための不安を解消し新生活へスムーズに移行することができた。

・事例5

‘大学生活全般についてのさまざまな困り感’を訴え、保健室から紹介されて入学直後から来談したケースである。本人によれば、幼少期より発達の遅れがあつて特別支援教育を受けることもあったというが、支援が受けられ

ない状況では授業についていけなかったり、人間関係で上手くなくじめずにいじめを受けたりすることもあったという。そして、海外留学をした際に抱いた海外への憧れや語学が得意であったことから本学へ入学したのであった。

このケースの場合には、大学生活のほぼ全期間にわたって来談することとなった。継続的なカウンセリングの中では、当初は五月雨式な来談であり、大学生活早期から卒業後の進路に関しての焦りが強く、目いっぱい活動するために不安を募らせたり身体症状も出ていたところを、情緒面のケアによって心と頭の整理をしながら、学生生活全般における就学支援や日常生活の相談・支援を行った。その後は、学年が上がるにつれて‘何かあった時だけでなく、何もない時でもいろいろと問題があるだろうから’と継続的な来談が可能となっていったが、その中では、具体的な就職活動において現実の壁にぶつかる中での発達特性ゆえの悩みや苦労といった話題が中心となったため、キャリアセンターとの連携や医療機関との連携を行った。そうした中で、在学中には進路が決まらなかったが、卒業後には就労支援機関を利用しながら最終的には就職することができた。

・事例6

体調不良で大学を休みがちになり、そのことで人目が気になるようになったために余計に休みがちになって留年に至り、自発的に来談したケースである。本人からは、‘人とコミュニケーションをとることが難しい’‘思った事がうまく言葉に出来ない’といった特徴が伺えたが、自分自身の困っていることを自覚したり言葉で上手く伝えることが非常に困難であった。また気分の浮き沈みが激しいところもあり、それもあって継続しての来談ができないのはもちろん、来談の約束を守ることも難しく、自宅でのひきこもり状態から抜け出せない状態が続いていた。なお、保護者は過保護・過干渉の傾向が強く、子供を心配しての学校に対する過大な要求が目立つところもあった。このケースの場合、本人が来談することが難しいこともあって、相談室では学内関係部署や教職員との連携や担当教員との連携を行っていった。しかしながら、本人の一見すると気まぐれで周囲に対して無頓着な自己中心的態度

とみなされやすい様子や保護者の言動によって関係者には否定的な印象が抱かれがちであり、支援体制をスムーズに構築したり効果的に機能させることが難しかった。また、教員の中には個人的に親切にしてくれる場合もあったが、その場合にも外国人教員であることから本人や保護者ときめ細かいやりとりの障壁となる部分が多々あった。

・事例7

家庭の問題とくに大きな喪失体験をきっかけにして解離症状を思わせる悩みを訴えて、自発的に来談したケースである。本人によれば、ずっと以前から不眠や抑うつ状態が続いており、また‘死にたい思い’を抱くなど生きづらさが顕著で、それに関連してリストカットなどの衝動的自己破壊的な行動や対人関係の不安定さを呈してもいた。生育歴に関する情報としては、幼少期を不安定で過酷な家庭環境で育ってきており、思春期以降は両親との間での激しい葛藤が顕著となっていており、またいじめを受けて不登校になることもあったという。

このケースの場合には、継続的なカウンセリングの中で、当初はきっかけとしての喪失体験や生活環境面での継続的なストレスという問題に垣間見える境界性パーソナリティなどを念頭においたパーソナリティの問題が想定されたが、認知能力の高さと偏りや社会性の独特な様子などから、その背景には非常に軽度ではあるが自閉症スペクトラム障害など発達障害の傾向を有するのではないかと次第に考えられるようになった。このため、当初は情緒面のケアを優先し心の安定や整理を図りつつも、ベースにある発達障害傾向を念頭においた理解と対応へと次第にシフトしていった。具体的には、人間関係の苦手さに焦点を当てた自己理解や対処法の相談・支援や、アルバイトや生活の仕方といった日常生活全般にわたっての相談・支援などについても、工夫をしていった。こうした中で、卒業することはできたが在学中に進路を決めることはできず、アルバイトをしながら就職など将来を模索する時期をしばらく持つに至った。

4. 考察

以上、学生相談室における「発達障害問題」の特徴を捉え、また対応を考察し、ひいては支援における課題を検討および提言するために、本学の学生相談室におけるいくつかの「発達障害問題」の実際事例を取り上げてきた。

まず、すべての事例に共通することであるが、大学において発達障害問題として該当する学生というのは、その障害特性の程度は軽度であることが多い。これについては、福田（2017^[6]）が指摘するように、大学生になる時点でさまざまなハードルを越えてきているわけであるから、それを可能にするための発達障害特性の軽さやそれを補うその他の能力や適応スキルがあるものと考えられ、またそのために、困難はあってもそれが発達障害特性によるものと自他ともに認識していない学生が多いことも考えられるため、表に出ないけれども困難を抱えている学生をどう把握して支援につなげるかということが課題になってくると思われる。一方で、診断がつく場合もある（事例3、4、5）。これについては、山内・杉岡・鈴木（2016）が示すように、診断がつくかつかないかの違いは不適応状態の程度に関係することが言えそうであるが、いずれにしろ診断がなくとも発達障害という認識をもって対応することが学生の利益になることは多いものと考えられ、それは今回の参照したケースでも当てはまることだと思われる。なお、こうしたことを踏まえると、診断がつかないような軽度の学生が多いがそれゆえに自己認識がなかったり曖昧である場合が多い大学の学生相談の場において、診断がつく場合にもつかない場合にも医学的観点とは異なる文脈で学生本人が自己に気づき理解を深める方法として、心理検査を使用することは有効であると考えられ、学生相談の現場でもいくつかの試みがなされてきており（たとえば黒山2012；丸山・中島2015）、今回の事例においても同様であると思われる（事例1、2）。

次に、よくある相談内容としては、「周囲と上手くコミュニケーションがとれない」（事例1）、「人とコミュニケーションをとることが難しい」（事例6）、「優先順位が苦手で何から手を付けていいか分からない」「ミスや忘れ物が多い」（事例2）、「集中力がない」（事例3）、「同時の物事がこなせない」

(事例2、3、4)といったところが多く、何らかの発達障害を疑わせるものとなっている。ただ、「身体症状」(事例1、3、5)や「対人不満感・被害感・恐怖感」(事例1)「情緒不安定」(事例2および3、5)「人の目が気になる」(事例6)「解離症状、不眠、抑うつ、リストカット、など」(事例7)といったように心身不調を呈している場合も多く、いわゆる二次障害ないしは併存障害(たとえば斎藤2009;辻井・杉山・望月(監修)2010;上野・市川2010;宮川2012)の問題が注目される場所である。なお、これに関しては、「学校へ行けない」(事例6)のように不登校やひきこもり状態といった行動化の問題や、パーソナリティの問題(事例7)も二次障害・併存障害に加えることができるのではないと思われる(注)。そして、現在に至るまでの生育歴に関する情報としては「いじめを受けた」(事例2、5、7)「不登校になった」(事例2、3、7)といった経験をしてきている場合は多く、このことから現在の問題だけではなく発達障害学生がたどってきたこれまでの道筋における生きづらさについて想像される場所である。いずれにしろ、助言指導や訓練的なアプローチが必要になる部分が大きい発達障害のケースにおいても、情緒的な部分をケアしていくことでいかに心の整理や安定をはかっていくかということは、通常の心理学的な不適応問題で悩む学生に対する場合とかわらず重要であると考えられる。実際にも、多くの学生相談カウンセラーが発達障害学生に対して提供している支援の中で最もよくなされていることでもある(吉良ら2018)。ただその場合には、継続的なカウンセリングによる個別的支援が欠かせないものと思われる。なぜならば、たとえば山内・杉岡・鈴木(2016)の調査にもあるように、発達障害学生が継続的にカウンセリングに通うことは実際には難しいことではあるが、それでも定期的にカウンセリングに通うことで、できればオンデマンドや五月雨式の来談ではなく何かあってもなくてもいつも同じ人に会いに行き続けること(たとえば事例5)で、学生はそこでの人間関係に支えられて、心の整理や安定化といったケアが可能となることはもちろん、さまざまな困りごとに取り組んでいくことも可能になるからである。そこでは、現代の心の問題や心の成長発達において人との関係性における体験を重視し、意味ある関係性の体験を

提供されることや関係性の体験での意味に気づいていくことの大切さを強調する川上（2012）を参照すれば、カウンセリングでの関係性を体験することが最も決定的な要素であり、それ以外の何をどうするかといった部分については表面的な事柄に過ぎないとまで言えるかもしれない。筆者としても、実際に発達障害の学生たちと関わっていると、本当にさまざまな問題が頻発し持ち込まれるのであるが、学生とともにそれらに取り組む中で、共に生きるとか共にあるといった感覚が開かれていき、それこそが本質的なのだろうと実感されることは多いものである。

次に、継続的な支援の経過中には、学生生活上のあらゆることに躓いて問題になることが多く（事例2、3、5）、さらには学生生活の範囲を超えて日常生活のあらゆる場面におけるさまざまな問題が相談にもちこまれ支援の対象となることも多い（事例2、3、4、7）ため、生活をまるごと抱えてサポートする必要があると言える。そのように考えると、たとえば不登校やひきこもり状態で学校に来ることができない学生に対しては、家庭との連携や場合によっては家庭訪問や生活支援といった支援が可能になってくるかもしれない（事例6）。そして、こうした中でも、学業に関してや就職や進路に関しての支援および医療機関受診に関する支援が必要になってくる場合も多い（事例2、3、4、5および6、7）。そのうち、学業についての就学支援では合理的配慮の観点からの対応が求められるが、岩田（2015）によれば、それは大学教育におけるパラダイムシフトでもあるので、教職員および一般学生への理解を求めることが欠かせないとされる。とくに、昨今では大学入学前から発達障害との診断や自覚があり、大学に対して相応の配慮や支援体制を求めてくる場合も出てきているため（事例4）、大学入学前の学生がいかにして入学後の大学生活に移行していけるかという大学移行支援の充実がいっそう求められてくると思われる。ただその場合には、萩原（2010）が述べているように、入学前に発達障害のある学生が自ら相談窓口を訪れるとは限らないため、相談窓口や相談体制の存在を周知徹底するなど大学側の方から積極的なアプローチが必要になると考えられる。また、それまで大きな問題を呈することがなかった発達障害学生の場合でも就職活動など進路問

題では困難に陥ることが多いが（とくに事例2、3、5、7）、福田（2017^[a]）によれば、発達障害学生への大学内での支援は進んできている中で、卒業はなんとか期待できるようになってきているが卒業後の自立・とくに就労は依然として大きな壁になっており、現在における通常の学内就職支援では不十分であるために学外の就労支援機関を利用する必要性が述べられている。そして、こうした就学支援や就労支援を行う際には発達障害の診断が必要とされる場合も出てくるので、その意味でも医療機関との連携が重要になってくるのであるが、その際には、学生にとっては自分が発達障害であることをどのように受け入れるのかという障害告知とその受容というテーマが生じることとなる（事例3、5）。これについて、福田（2010）によれば、自分自身が発達障害だと知ることにはメリットとデメリットがあるとされる。したがって、相談者としては受診や診断ありきではなく、本人の心の動きや過程に丁寧に付き合わなければならないところだと思われる。いずれにしろ、発達障害学生の支援においては大学内での支援体制をいかに構築し機能的にいかしていくかということが欠かせないと言える。それは、先述したような在学中における学生のあらゆる生活場面を相談・支援の対象とするという意味であるとともに、在学中にとどまらず卒業後の社会的自立を見据えたり入学前の学生のニーズを想像したりといった時間軸の意味でもあり、前者を‘生活を丸抱えする’アプローチとするならば、後者は‘人生を（ある程度）丸抱えする’アプローチと言えるであろう。そしてこうしたことのためには、桶谷・水野・吉永・西村・斎藤（2011）が提唱するように、発達障害の学生を「支援」ということから一歩抜け出して、彼らの「社会を保障する」というところへと進まないといけないのかもしれない。

・注

二次障害・併存障害の問題については、精神分析的なアプローチからの衣笠（2007、2008）による重ね着症候群という考え方も存在する。それによれば臨床的表現は多彩だとされるが、その中でもパーソナリティ障害と発達障害がいずれもその人の個性に関する領域であり往々にして判別が難しいことが多いという実情を鑑みれば（事例

7)、この概念はパーソナリティ障害の場合に特に有効であり重要な観点になるのではないかと考えられる。

5. おわりに

以上、学生相談室での実際のケースを参照してきた。学生相談室における「発達障害問題」の特徴についてさまざまな観点から取り上げてきたが、そこから言えることは、とにもかくにも手間暇がかかるということだと思われる。しかしながら、障害者差別解消法の施行（2016）もあり、発達障害学生への配慮や支援は避けられない課題になっている。そして、発達障害学生への支援を考えることは、他の一般学生にとっても過ごしやすいキャンパス環境を作り出すことにつながると思われる。なによりも、手間暇をかける／手間暇をかけられるといった相互的な関係性の体験は、川上（2012）がいうように、それこそが発達障害問題には必要なのであり、こうした当たり前の関係性体験が希薄化し欠如してきているといったことが発達障害問題を生み出す原因に大きくかかわっているのかもしれない。

その上で大学の相談・支援体制を鑑みると、関係者の個別的な熱意に委ねられている部分が大きく、学校全体としての意識や体制は不十分に思われる。今後は、手間暇をかけることができる十分なものとして、学校全体としての統一された意識および理解や対応スキルを高めることと、その反映としての統合された支援体制の構築といったことが、課題であろう。

・謝辞

学生相談室の相談員である中村美紀氏と藤村江利子氏の両名には、日ごろから相談業務に携わる仲間として、今回の論考において貴重なご教示を頂いたことに、この場を借りて感謝申し上げます。

・文献

- 青野透. (2017). 発達障害学生と大学教育 - 職員対応要領を中心に - 大学教育学会誌, 39,(1),48-61.
- 福田真也. (2010). 大学生の場合 - 学生相談の立場から - 特集：障害の告知とその受容「自分が発達障害とわかること」を肯定的に支えるために Asp heart：広汎性発達障害の明日のために 9,(2),24-27.
- 福田真也. (2017[a]). 自閉スペクトラム症大学生の就活：学生相談での支援（職場の発達障害）こころの科学 195,47-51.
- 福田真也. (2017[b]). 新版：大学生のこころのケア・ハンドブック 金剛出版
- 萩原豪人. (2010). 特別支援教育を受けてきたアスペルガー症候群の学生の支援体制 学生相談研究, 30,(3),167-178.
- 岩田淳子. (2007). 学生相談界の動向 - 発達障害学生の支援の研究 - 特集：大学における特別な教育的ニーズへの対応 障害者問題研究, 35,(1),52-57.
- 岩田淳子. (2015). 発達障害と合理的配慮 成蹊大学学生相談室年報, 22,3-11. 成蹊大学学生相談室編
- 川上範夫. (2012). ウィニコットがひらく豊かな心理臨床 - 「ほどよい関係性」に基づく実践体験論 - 明石書房
- 衣笠隆幸. (2007). 重ね着症候群と軽度発達障害 - スペクトラムとしての軽度発達障害 1（スペクトラムと呼ばれるファントム）現代のエスプリ, 474,62-69. 至文堂
- 衣笠隆幸. (2008). パーソナリティ障害と発達障害 - 重ね着症候群の研究 特集：発達障害という記号 精神医療, 49,35-45.
- 吉良安之・高石恭子・内野悌司・菊池悌一郎・福留留美・福盛英明・松下智子・田島晶子. (2018). 学生相談カウンセラーによる発達障害学生への支援の現状に関する研究 学生相談研究, 39,(1),1-13.
- 黒山竜太. (2012). 発達の視点からみた学生の自己理解と支援におけるWAIS-Ⅲの活用 学生相談研究, 33,(2),139-150.
- 丸山智美・中島道子. (2015). 発達の偏りがある学生に対するWAIS-Ⅲの支援促進機能の検討 学生相談研究, 36,(2),110-122.
- 宮川充司. (2012). 青年期から成人期にかけての発達障害とパーソナリティ障害 - 重ね着症候群とアスペルガー障害 - 相山女学園大学教育学部紀要, 5,107-114.
- 中嶋章作・鷺見長久. (2015). 学生相談室から何が見えるか 特集：職場における保

- 健康管理の現状 - 本学保健管理センター開設に向けて - 京府医大誌, 124,(8),557-565.
- 日本精神神経学会 (監修). (2014). DSM-5精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院
- 岡田尊司. (2012). 発達障害と呼ばないで 幻冬舎新書
- 桶谷文哲・水野薫・吉永崇史・西村優紀美・斎藤清二. (2011). 発達障害学生の大学移行支援 学園の臨床研究, 10,39-49.
- 齊藤万比古. (2009). 発達障害が引き起こす二次障害へのケアとサポート 学研教育出版.
- 篠山大明. (2019). 発達障害は『ブーム』なのか 再考「発達障害 - 子どものこころの診察室から - 教育と医学, 67,(7),566-573.
- 滝川一廣. (2004). 「こころ」の本質とは何か - 統合失調症・自閉症・不登校のふしぎ - ちくま新書
- 辻井正次・杉山登志郎・望月葉子 (監修). (2010). 大人の生活完全ガイドーアスペルガー症候群 保健同人社
- 上野一彦・市川宏伸. (2010). 図解よくわかる大人のアスペルガー症候群 ナツメ社
- 山内星子・杉岡正典・鈴木健一. (2016). 学生相談機関における発達障害学生の来談状況と課題 名古屋大学学生相談総合センター紀要, 16,25-29.